

どちらも ^{201}Tl -SPECT では cold area を示しており、病理診断は astrocytoma grade I であった。

【結論】全ての症例において glioma の grade と ^{201}Tl の uptake の間に相関を示した。更に症例1, 2では radiation necrosis と recurrent glioma の鑑別に ^{201}Tl -SPECT が有用と思われた。

P-B-10) $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA-ヒト血清アルブミン (HSA-D) SPECT による脳腫瘍の血管床及び血管透過性の評価について

妹尾 誠・中川原 譲二
 福岡 誠二・片岡 丈人
 諫山 幸弘・安齊 公雄
 早瀬 一幸・吉田 英人
 末松 克美・中村 順一 (中村記念病院) 脳神経外科

【目的】天幕上の脳腫瘍25例〔転移性脳腫瘍10例, 悪性星細胞腫 (Gr. 3) 8例, 髄膜腫7例〕を対象として, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA-ヒト血清アルブミン ($^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HSA-D) 及び ^{201}Tl SPECT を施行し, 前者の臨床的意義について検討した。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HSA-D SPECT ではトレーサー投与10分後に early 像, 5時間後に delayed 像を撮像し, 各々 HSA-index (腫瘍/皮質領域) を算出し, その経時変化及び Tl-index (腫瘍/対側大脳) との相関関係を分析した。【結果】各種腫瘍型において HSA-D delayed index は early index よりも有意 ($p < 0.05$) に増加した。悪性星細胞腫と髄膜腫で, HSA-D early 及び delayed index が有意 ($p < 0.01$, $p < 0.001$) に相関し, 悪性星細胞腫では delayed index と Tl-index が有意 ($p < 0.05$) に相関した。【考察】HSA-D early index は, 腫瘍の血管床, delayed index は血管透過性を反映し, これらと, 悪性度を反映するといわれる Tl-index の複合利用は, 臨床的に有用と考えられた。

P-B-11) C-11 methionine による脊髄髄内腫瘍の PET イメージ

笹嶋 寿郎・峯浦 一喜 (秋田大学脳神経) 外科
 伊藤 康信・古和田正悦
 畑澤 順・小川 敏英 (秋田県立脳血管) 研究センター
 上村 和夫 (放射線科)

脊髄病変の診断は MRI などの非侵襲的画像診断の進歩で飛躍的に向上している。最近, 頸髄髄内腫瘍において C-11 methionine (Met) PET を行い, 若干の知見を得たので報告する。

症例は68歳の男性で, 5年前より両足底から上行性に進行する知覚低下があり, 1年前には進歩が困難になった。入院時, C8 以下の知覚障害と軽度の四肢麻痺があり, 両下肢の腱反射が亢進していた。MRI で C3/4 および C6 から Th2 の椎体レベルに T_1 強調像で等信号, T_2 強調像で高信号の髄内病変が認められた。病変は Gd-DTPA で境界鮮明に均一に増強され, その頭および尾側に嚢胞を伴っていた。PET は画像再構成による正中矢状断で, Met 集積域が C6 から Th2 レベルに明瞭に描出され, ことに Th1~2 レベルの腹側に高集積域がみられた。手術所見では腫瘍が C6-Th2 の Met 集積域に存在し, Met の高集積域で周囲組織と強く癒着しており, 栄養血管が豊富であった。腫瘍摘出と嚢胞の開放を行い, 組織診断は ependymoma であった。

P-B-12) Symptomatic pineal cyst の1例

岡崎 秀子・田中 隆一 (新潟大学脳研究所) 脳神経外科
 青木 廣市・新井田広仁 (新潟県厚生連中央) 総合病院脳神経外科
 中沢 照夫

閉塞性水頭症により発症した1例を経験したので報告する。症例は57歳女性。頭重感を主訴に受診したが, 軽度の知能低下以外には, 特に神経学的に異常を認めなかった。画像上, 側脳室は著明に拡大し, quadrigeminal plate の上方に位置した cystic mass により中脳水道は閉塞されていた。CT cisternography では cyst 内への造影剤の移行は認められなかった。MRI では Gd により薄く平滑な wall が描出された。Transtentorial supracerebellar approach にて cyst を亜全摘し, 症状の改善をみた。Pineal cyst は画像診断の進歩に伴い MRI で2.5~4%に発見されるが本例のように症状を呈する例は稀である。

P-B-13) 滑車神経鞘腫の1例

長野 隆行 (盛岡赤十字病院) 脳神経外科
 佐々木一裕・川守田 厚 (同 神経内科)

症例は39才の女性。主訴は頭痛・嘔吐・複視。現病歴は来院2年前より左目がちらつき始め, 平成4年7月20日頃からはめまいが出現。7月26日朝, 左前頭部の頭重感・嘔吐・複視を訴え, 同日当院神経内科を受診。脳腫瘍の診断で8月22日当科紹介入院となる。神経学的陽性

所見は不完全な左 Bielschowsky' sign と左外転神経不全マヒを認めた。血液・尿検査、頭部単純写にては特に異常所見は認められなかった。MRI では左後床突起後方に、T1WI で low, T2WI で high intensity, Gd で周辺が不均一に enhance される 4×3×3 cm の境界明瞭で、脳幹部を強く圧迫するほぼ円形の腫瘍が認められた。8月26日 subtemporal approach にて腫瘍の全摘術を行った。腫瘍は黄白色で軟らかく、cyst を含み、テントを切開すると腫瘍上に滑車神経が癒着・圧迫されており、滑車神経 origin であることを確認した。組織診は Neurinoma の Antoni A and B type であった。滑車神経鞘腫は極めて稀な例であり、現在まで7例が報告されているに過ぎない。若干の文献的考察を加え報告する。

P-B-14) 神経線維腫症 (NF1) に発生した多形性膠芽腫由来細胞株の樹立とその性状解析

扇一 恒章・栗本 昌紀
野上 予人・西島美知春 (富山医科薬科大学)
遠藤 俊郎・高久 晃 (脳神経外科)

症例は41歳女性。10歳時に cafe au lait spot と皮下神経線維腫の多発を指摘され神経線維腫症と診断された。1991年12月13日脳圧亢進症状と歩行障害にて入院した。CT, MRI にて脳梁膝部に腫瘍を認めた。12月25日腫瘍摘出術を行ったが術後著しい髄腔内播腫をきたし1992年1月3日死亡した。剖検所見では脳梁膝部に多形膠芽腫を認めたほか下垂体腺腫、甲状腺腺腫および脊髄神経線維腫を認めた。

手術標本は細切後 0.25%トリプシンにて酵素処理した後、10%牛胎児血清を含む MEM にて初代培養を行った。今日まで90代以上の継代培養が可能で本細胞株の倍加時間は73時間であった。免疫組織化学的検索では本株は GFAP, Vimentin, S-100 蛋白陽性でグリア系細胞由来と考えられた。なお NGF は陰性で一部に NGF 受容体陽性の細胞が見られた。現在染色体分析を行い、腫瘍化に至った遺伝的背景に付いて検討中である。

P-B-15) ステロイドが著効したリンパ球性下垂体炎と思われる1例

伊東 民雄・岡 亨治
武田利兵衛・高坂 研一
鷺見 佳泰・上山 憲司
堀田 隆史・末松 克美 (中村記念病院)
中村 順一 (脳神経外科)

ステロイドが著効し両耳側上1/4 盲の改善したリンパ球性下垂体炎と思われる1例を経験したので診断・治療法の文献的考察もあわせて報告する。

【症例】37才、女性。平成5年6月流産、平成6年1月より頭痛を訴え入院となった。MRI にて suprasellar extension をきたす pituitary mass を認め、peripheral に強いエンハンス効果を示した。TSH, T₄, cortisol の軽度低下、負荷試験ではすべて反応性の低下を認めた。以上よりリンパ球性下垂体炎を疑い、プレドニン (40 mg/day) を1週間経口投与したところ、mass は著明に縮小し、視野も改善した。

【結論】1. リンパ球性下垂体炎は、臨床経過・ホルモン検査・Gd-MRI を中心とした画像診断により biopsy することなく診断が可能である。2. 本例のようにステロイドの著効する症例があるため、治療選択の第一として、ステロイド投与を考慮すべきと思われた。

P-B-16) 頭蓋内病変を伴った Wegener 肉芽腫症の1例

朽木 秀雄・山田 潔忠 (山形県立日本海病院)

Wegener 肉芽腫症に頭蓋内病変を伴うことは稀である。我々は Wegener 肉芽腫症の硬膜進展により神経症状を呈し、硬膜生検で診断され、治療により著明に改善した1症例を報告する。

症例は43歳男性。1990年春より頭痛、発熱が出現し、近医での肺・鼻腔腫瘍生検にて Wegener 肉芽腫症と診断され、緩解、増悪を繰り返していた。1992年12月より躁鬱状態が周期的に出現し、1993年春より不穏状態、構語障害および右上肢のしびれを一過性、反復性に呈するようになった。MRI で硬膜の多発性肥厚を認めた。硬膜生検では硬膜はびまん性に肉芽腫様に肥厚し、組織的には好中球の浸潤した肉芽腫の像を呈しており、Wegener 肉芽腫症と診断した。ステロイド、サイクロホスファミドにより症状は著明に軽快し、MRI 上も硬膜肥厚は消失した。